

瀬戸内の島々の最近の光明 — 志々島と小豆島 —

稲田道彦

1 はじめに

筆者が島嶼世界を考える時に、いつも自分の考えの基準とする島がある。志々島である。現在は行政的に香川県三豊市の一部となっているが、遠い過去には隣の栗島とともに一つの行政村をなしていた時代もあった。面積は0.59平方キロメートルという小さい島である。ここに第2次世界大戦直後には約1000人の人口があったという(上田勝見・阿部日吉1974、p37)。これが今では約20名程度に減少してしまった。この減り具合は驚きである。私にとって志々島が特別である理由は、志々島だけが様式の違う墓をつくることであった。これについてはここでは述べない(稲田道彦(2010))。志々島に何度も通ううちに瀬戸内海の島嶼のもつ特徴をこの島が凝縮しているように思え始めた。瀬戸内海にあって、面積が小さいことがもたらす影響を考えるのに最適であると思えた。島において、人々は狭い領域内で生活を展開せざるを得ないという宿命がある。狭いことは、まず自然環境として大きな制約となる。川がないので人が生活をするうえで必須の水が得にくい。また面積も小さいので燃料となる薪も一度取ってしまえば再生に少なくとも10年はかかってしまう。飲料水と燃料の問題を克服しなければ居住が許されなかった。次に主要産業の一つとなる農業のための耕地も狭いので農業生産物は生活を維持していくために工夫される必要があった。自給的な性格の強い時代に、生活をしているうちは何とかだったが、金銭で決済する貨幣経済社会の到来で、子供を育てる過程で金銭の蓄えの問題が大きくなった。他地域に対して島から何かを売って、島に資金を蓄積していなければならぬ時代が重みとなった。自給的な島の生活は変換を余儀なくされた。幸いに志々島は江戸時代からの伝統で、付近の漁民に比べて非常に広い漁場を占有していた。明治時代から漁業による収入は多かった。しかし瀬戸内海域の漁業資源の減少とともに漁業が縮小していった。ある漁民の話では1960年代の最盛期には一網に12貫(約45kg)のイカナゴがとれたが、現在ではイカナゴそのものが地先の漁場から消えてしまったという。そしてそれを餌にしていた大型魚も消えてしまったという。漁業資源という島民のスケールではどうしようもない問題も島を取り巻いている自然環境の一つである。

自然条件だけでなくそこに住まう人の側が作る制約もある。社会の特質として、近所の人と共同関係を維持するために、濃密な人と人との関係を構築せざるを得ない。人口が少ないので、島におよぶ危機や災害や種々の問題は全島民で克服していかなければならない。そのため島では、種々の連帯組織、階層による支配・被支配という組織、人々に希望を与える宗教などの人と人をつなぐいくつもの関係が生み出されてきたと考えている。基盤とする自然・人文条件がある種のバランスの上に成り立っているため、なんでもない出来事が対処を誤ると島では危機的状況になった。孤立しているため、世の中の動きから超然とし

ているように想像される島が、時代の変化の影響が一番鋭敏に表れた場所でもあったと考えている。政治においても、経済においても、文化においても。島の人々が直面してきた状況はそれぞれの問題を人任せにはできなかった。筆者は志々島については報告したことがある（稲田道彦、2007）。この時に島に感じていたのは、長い間にわたって人口が減少し続け、住民の高齢化が一年一年進んできた志々島の将来がどのように想像されるのであろうかという気持であった。

そういう中であって、今回の報告は志々島に現住民に対して一世代若い世代の人が住み始めたことを光明であると感じて筆をとっている。ここでは、今までの状況と、新しい移住者にスポットライトを当てて考えて見たい。

もう一つの光明は小豆島の観光の黎明期に活躍した島の人々の活動に光が当てられたことである。国立公園制定 60 周年の記念事業としての事業であるが、明治時代に幾多の人々の活躍があったからこそ今の小豆島の観光があることに気づき、観光の基礎を作った人々の顕彰を小豆島の住民自身が行ったということである。私達は身近な人々の活動について評価が下しにくい。余りに身近で知っていることであるからだ。しかし大きな歴史の流れの中でこの出来事は忘れずに記録されておかなければならない。自分達の先人の素晴らしさに気づき顕彰することにおいて、今島に住んでいる島民の意識の高さと素晴らしさに光を見た思いがしている。

2 志々島の人口減少の時代

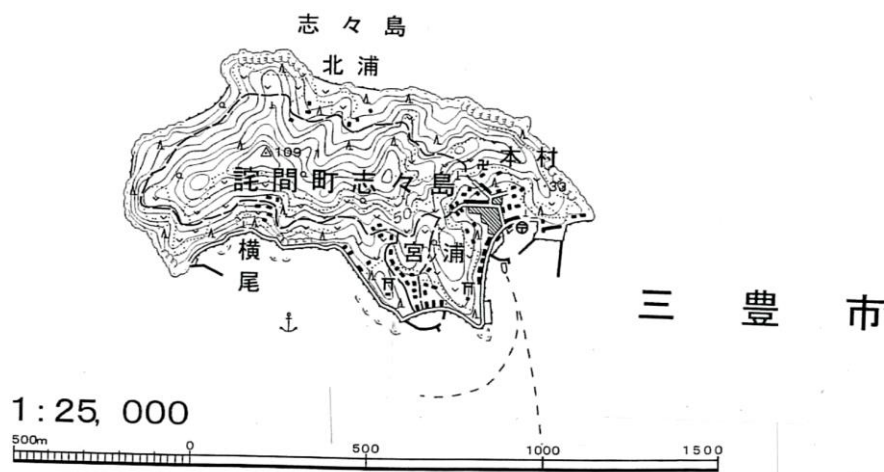


図1 志々島

志々島の生活環境をみてみると、日本の他地域の島嶼に比べて決してとびきり条件が悪いとはいえない。約 20 分で地方（本土）にわたることができるし、日に 3 往復の船便がある。交通の便は便利ではないが、交通の条件が志々島より悪い島は日本に多数存在する。面積が小さいことと、島に自動車の通行ができる道路がごく限られているため、人力での

物品の運搬を余儀なくされることが生活上の一番の弱点となっている。島の面積は 0.59 平方キロメートルである。島の最高点は 109 メートルあることより、傾斜地の地形にすべてが展開している。平地の島よりは土地に保水力があるといえる。水には困った時代が長かったが、現在は海底送水により水には不自由がなくなっている。燃料のプロパンガスの導入とともに生活のためのインフラは整備されても人口減少が続いてきた。

なぜ志々島は人口が減少していくのであろうか、その減少の背後にある地域構造のメカニズムを知りたいと思っていた。図 2 の人口変化のように、1960 年代後半から連続して減少が続いている。志々島の人口減少は他島に比べても早い時期にはじまった。急激な減少が 1976 年ころを境に緩やかな減少へと転換する。1970 年に粟島中学が分教場になり、1972 年に粟島小学校が詫間小学校粟島分校になり、1976 年に粟島分校が閉校になった。学校の閉校、これがこの時期の人口変化に大きく影響した理由の一つだと考えている。学校がなくなり、当初は祖父母が付き添いで本土の学校のそばに一緒に下宿した時代もあったそうである。子供が島にいなくなり、その親世代も島を出て行った。島の主産業の変換点もこの時期に重なる。瀬戸内海の漁業の不振と農業の生産性の低さが、高度経済成長期の日本の都会へと若い世代の転居を誘った。

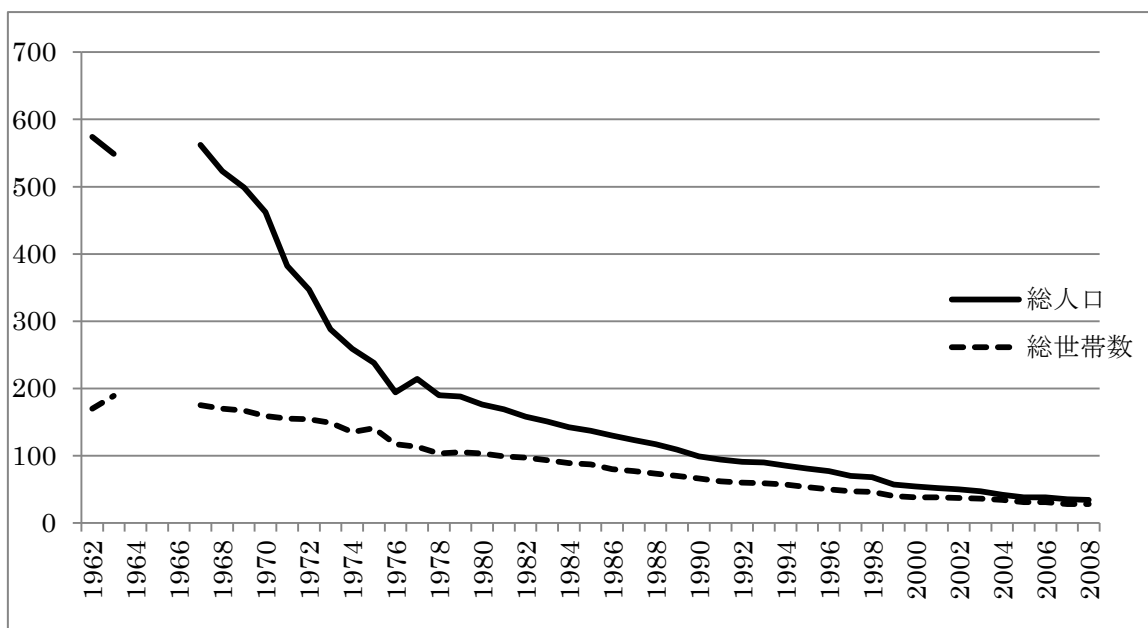


図 2 志々島の人口と世帯数の変化（出典離島統計年報、数字は住民基本台帳の数、なお 1964~67 年はデータが得られていない）

そして島に残された老人世帯が徐々に高齢化し、死去による人口の自然減が島の人口を減少させていった。この現象が 30 年余続いている。このグラフでは住民基本台帳の人口が用いられている。この島に住民票がある人の数である。現在この島に住んでいる人数よりは多くなっている。高齢化が進み自力で生活できなくなったり、病気などの障害の理由で、

援助を必要とする人はこの島で生活を持続することができずに特別養護老人ホームなどへ入所して現在島にいない。その人数が人口に加えられている。

高齢化も限界に達していた。それは島の人口の自然減少という形で現れていた。図 3 のように人口の自然減少が続いている。この島で最後の赤ちゃんの誕生は 1977 年である。死亡による人口減少が続いていることを示している。死亡数よりも出生数が多かったのは 1962 年のみである。情緒的な言い方をすれば、島の老人はずっと先輩たちの死を見続けてきたことになる。

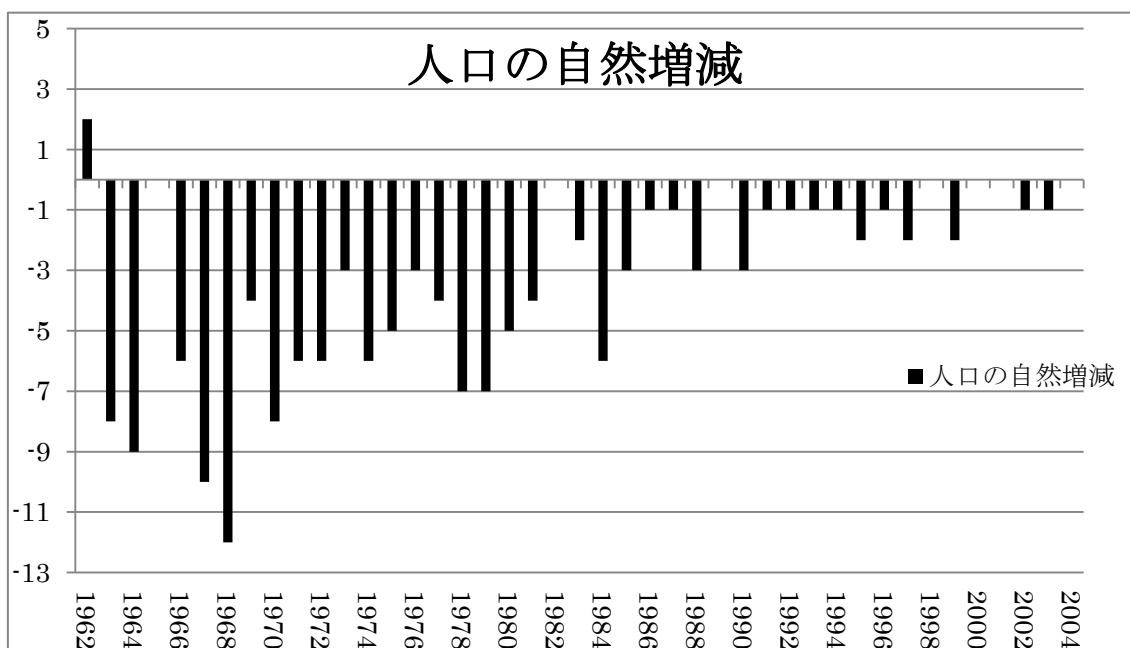


図 3 志々島の人口の自然増減（出典離島統計年報、なお 1964～67 年はデータが得られていない。単位人）

図 4 に示す社会増減では、志々島に転入者が不在ではなく、転入より転出が多いので、人口の社会減少となってきた。1970 年代までの社会移動は都会への転出のための人口移動である。移動数も多い。1980 年代以降の転出者は高齢になって島で一人で生活がままならぬようになり、家族に引き取られていたり、老人ホームのような施設に移転する際に住民票を移すということによる転出が多いと聞かされた。

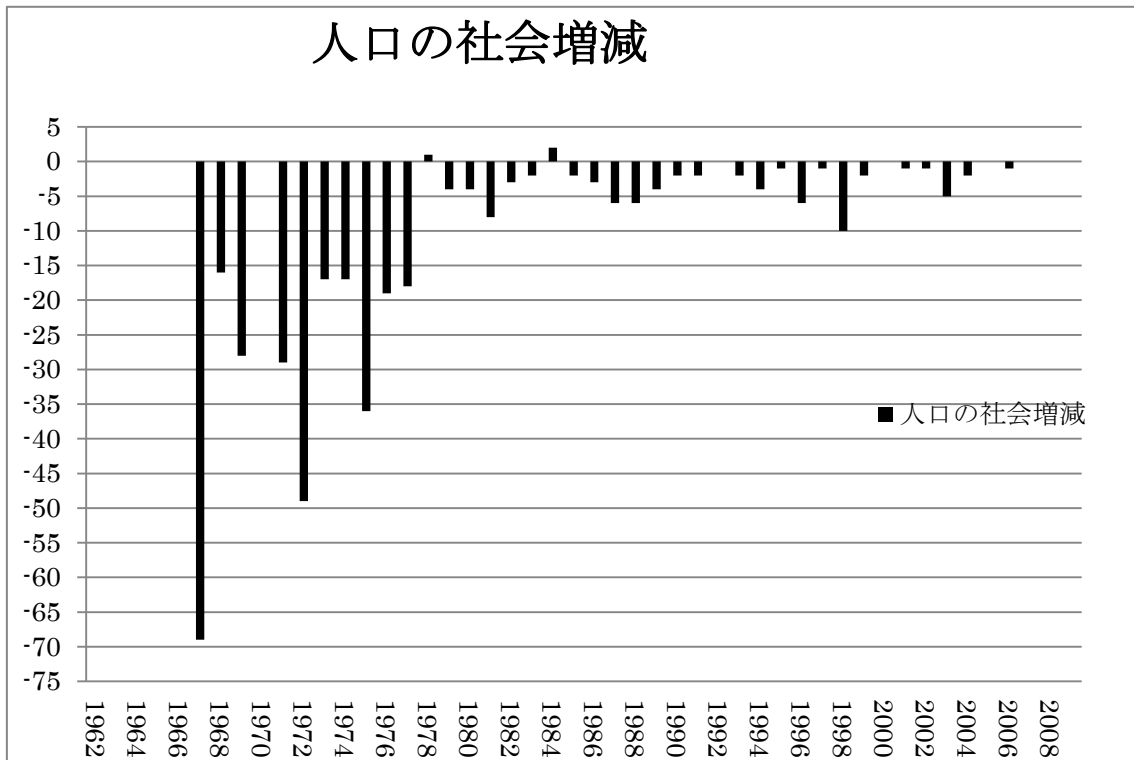


図4 志々島の人口の社会増減（出典離島統計年報、なお1964～67年はデータが得られていない 単位人）

3 志々島の光明

長い間人口と世帯数の減少が連続していた。何度もこの島を訪れているうちに住民のこぼす嘆きを、以下のように聞き取った。実際の発言とは幾分相違するが筆者の気持ちに届いた彼らしゃべりである。島に子供がいなくなり、子供の親の世代も島を離れていった。家には老人世帯が残されていった。時間の経過とともに住人の高齢化が進み、家の手入れが行き届かなくなり、そのうちに亡くなる人も現れた。集落の景観でいうと、徐々に空き家が目立ち始め、住民の高齢化と単独居住となっていった。何とかならないかという焦燥感で回りを見つめても時間の流れを食い止めることができずに、大いなる時の流れの中で住民は流されていくしかなかった。人の住まなくなった家屋が維持もままならず朽ちていくのを見つめていた。かつて人の住んでいた家が廃屋となり、放置されているうちに、腐って屋根が落ち、全てが地面に落下し瓦礫となり積みあがっても、住民はそこに住んでいた居住者の思い出だけを胸にしまいながら、なすすべがなくがれきの空間と共存し生きてきた。その先にはきっと自分の居住地もそうなるに違いないという想像を伴いながら。人が歩く道しかないので救急の際に間に合わないという理由で住み慣れた家を後にして、本村に移転した人もいた。

高齢化、限界集落と名前がつけられるがその中に身を置いた老人は、過酷な時代の流れを感じながら生きてきた。起こっている現象は理解できるが、その中に身を置いている人

の心理までは説明できない。限界集落という言葉の中で考えまいとしても、いくつか思うことは出てくる。それはこの地で暮らしてきた自分の人生への思いである。先祖代々この地で生きてきた自分達の暮らしが自分で終わるのかという嘆息である。自分自身も高齢化により身体が自由が利かず、思うように物を創造することができないという嘆きもある。誰かになんとかしてもらいたいと思っても、社会変化の流に小さな杭をさすことができても、またいずれ大きな流れに戻ってしまう。このような変化の少ない世界になってからも、島にはいくつかの思い出ができた。歌手の三波春夫が来て花畑の中で歌を歌ってくれたことや、映画「ふーてんの寅さん」のロケ隊が来て、島のいい景色を映画の中におさめてくれたこと。映画「機関車先生」にも登場し島の誰もが誇りとする大楠が映画に登場したことなどのできごとを生涯の大きな思い出とできている。

そういう中で島に次世代の人々が突然、帰ってき始めた。

2007（平成19）年にAさん夫妻、2008年ころにBさんとCさん、2008年に同じくDさん、2009年にEさん夫妻とお兄さんFさん、そしてGさんの9人である。Aさんの奥さんとEさんの奥さんを除いて全員男性である。およそ3年間に9人もの転入があった。これだけの人口減少の時間が長かったのに、突然、今まで島にいる人の人数よりは少ないもののその半数に匹敵するぐらいの人数で帰ってきた。帰ってきた人は、Aさんの奥さんを除いて全ての人が子供時代に島に住んだか、島にお爺さんお婆さんが住んでいたという親戚をもつ人々である。プライベートな情報を極力省きながら、それぞれの人を紹介するとBさんとCさんを除いて、定年退職を過ぎた年齢での帰島になっている。それぞれ都会等で生活していた住居を払って、ここを主たる居住地とする転居である。年齢ではBさんが40歳代、Cさんが30歳代を除けば、60歳代の人が多数である。彼らの子供世代の人は伴っていない。BさんとCさんは伯父と甥の関係で、縁者の家を拠点に島での生活を始められた。最初島の不便な場所にある家に入られたが、島の中心地の本村に住居を移られた。BさんもCさんも現在決まったお仕事はされていない。全員が島内で仕事をしない形で島の生活を始められた。

これだけの人が島に帰ってきて住み始めた。前から住んでいた人が筆者に向かい、島に活気が出たように感じると言われた。次世代が住むことの心強さを感じていらっしやるという気持ちの表出であった。今までの居住者の期待に、帰島者も十分こたえている。道路の清掃、島のいたるところへの花壇の設置がなされている。台風等で、屋根瓦が壊れても老人では上がることのできなかつた高所へのぼって修理をしてもらったとか、高齢者ではできなかつた重い荷物を運ぶことをいとわずしてもらったことなどへの感謝が聞こえた。

島での生活を始めた帰島者も今までの島の生活のしきたり、宗教等の行事を尊重する形で島に入り込んでいったことが島への溶け込みを容易にしていた。彼らも見えない所で島に溶け込む努力をされている。そして幼少期の島の居住経験がそれを可能にしている部分もある。若い世代が帰ることによって、以前の島の住民が営んでいたさまざまな行事をとり戻す動きもある。



図5 約50年ぶりに復活した志々島のだんじり

(出典：広報みとよ 2012 1月号 第73号より転載)

もう長いこと倉庫にしまわれて、お祭りに出されることのなかっただんじりが約50年ぶりに復活した。他地域の専門家の知恵をかりながら、補修もしつつ、昔の祭りで使われただんじりが組み立てられた。志々島の昔ながらの祭りを再現した。段々と島の昔の日常の生活が復活する思いがあったのではないだろうか。住民が老人だけになり、地区の行事が簡素に、より簡素になされていった。生活の中から、余裕の部分であった、楽しみや潤いが抜け落ちて行った。こういう今までの生活は、行事が復活してみると島にとって異常な事態であったことを思わせる。楽しみの復活は地域の活性化につながる。図5の写真の中で、だんじりの向こうに座って見つめている島の年よりの喜びが伝わってくる写真である。



図6 島の誇り 大楠

大楠を保護・継承する動きも帰島者を中心に動いている。島民とボランティアの人達によって、年2回、楠の回りの雑木や雑草が切り払われ、手入れされている。それに至る歩道が整備され、沿線には花壇が作られ、島で全山が花で埋まっていた時代の名残であるマーガレットが植えられている。大楠周辺が放置されていた時代から、管理保護されている状況へ移っていると思われる。各地の巨樹を訪ねた経験のあるE夫妻は人の踏み固めによる土地の劣化を恐れられている。また樹木医などの専門家の知恵や診断によってさらに大楠を守っていきたいと考えている。これだけの巨樹を見に来る人は少しずついる。整備が進めば来島者が少しずつ増えると思われる。これが島の交流人口となり、島にある商店等の売り上げに貢献するなど島の発展を期待されている。

交流人口があることが、フェリーを維持し、人々の生活に活力を与えるきっかけになる。また同じく帰島者のAさんを中心に大楠を見下ろすもう一方の高台に見晴らし小屋が建設されている。瀬戸内海と大楠が見下ろせる良い場所である。せっかくの見晴らし小屋が訪問者と島内の生活者に満足を与える施設として動き出すことを期待している。これら大楠を守る運動にオリーブ基金の援助を受けている。今まで住民にはなかった知恵である。

さらに福武財団の援助を受けて、志々島に「ヤギと蜂蜜」を導入して島の農業を再生する試みがなされている。今ヤギを飼う場所を切り開いているところである。元は島の畑だった所が放棄されて雑木林に戻っている場所である。さらに大楠のそばに見晴らし小屋も作っている。これらの動きは小さいけれども島の産業を考えるとときに大事な一歩になることも予測される。



図7 建設途中の見晴らし小屋

志々島においてはまだ問題は解決されたわけではない。島を維持することのできる人が戻ってきただけで、島に根を張ってそこで暮らしていける生産や産業が確立したわけではない。2005年センサスで志々島の職業別就業者を見ると、就業者が2人で、販売小売業が1人、複合サービス業が1人となっている。島に基幹産業が成立したわけではない。島の人々が農業と漁業を主たる産業として、多くの人の生活を養っていた時代は程遠い。

海に囲まれているため温度が比較的高く、春先特に彼岸の墓参り用の花を生産し、全島が花で埋まっていた時代を懐かしむ声は高いが、他産地が切り花の産業を興して以来、温暖な気候を利用するだけの条件では切り花産業は他産地との競争に遅れて行った。高齢化により労働人口も減った。大楠を中心とした観光をおこし、島を訪れる人々に島の花を観光客に買ってもらう運動も考えられる。島に来てくれる人を持続的に獲得する方向は島の振興につながると考える。

志々島の将来を考える時に、大楠を一つの大きな観光資源とする観光業と、それに付随する形で展開する地場産業の育成が今の段階で考えられる目標になると考える。帰島者を中心に展開されている大楠の整備は観光のすそ野を整備するという点で時機を得た方向であると考えられる。



図8 今も続けているマーガレットの栽培、切り花として出荷する
(2012年1月)

4 小豆島の観光の歴史

瀬戸内海の島嶼地域の観光地の中で、観光地として最もよく知られているのは、広島県の厳島と香川県の小豆島であろう。ここでは小豆島の観光の黎明期の問題を考える。瀬戸内海の島において、それぞれに島の有する観光資源があったから観光が主たる産業になったのだろうか。島嶼の観光資源はそれぞれ個々の島が有している資源は島独自のものである。しかし、地域全体で考えると、その差は小さく類似しているともいえる。島の事物を観光資源として他地域の人を引き付けるように情報発信し、人々にイメージとしての思いを与えるように整備した人の動きがあったかなかったかが、現在の観光産業の差につながったと考えることがある。多分両方の動きが個々の島では違っているが両方の動きの結果として現在の観光地が出来上がっていると考え。そしてこの議論を続けると、もし前者の傾向が強いなら、観光地という場所はすぐれた観光資源を有する限られた場所に限定されるであろうし、もし後者なら、適切な人の動きを受けてどこの場所でも観光という産業を展開する可能性はあると考える。

この章では香川県において、そして瀬戸内海において観光という産業で成功してきた小豆島の観光地として形成される前の生成期に観光地となるべく努力をつくした自分達の地域の先人の歴史を書き、出版した人々をとりあげる。

5 小豆島の過去の観光開発の偉業者をたたえる動き

瀬戸内海国立公園が日本の国立公園成立の際の最初の指定地であり、その瀬戸内海国立公園にあって、小豆島と屋島が主要な景観であった（稲田道彦 2007）。小豆島にあって、国立公園制定、しかも第一号の国立公園として指定されたことは、瀬戸内海の観光の歴史の上では、大きな出来事である。国立公園に指定される以前に小豆島において、郷土愛に燃えた先人の活動を、国立公園制定 60 周年を記念して顕彰する活動が 1996（平成 6）年に行われた。いくつかの行事とともに、その時 3 冊の本が出版された。地元において歴史に埋もれてしまって、忘れ去られようとしている先人の献身的な偉業を、地元の方々が掘り起こし、出版されたことは意義が大きい。このことは明確な資料として将来に引き継がれる。この事の持っている意味が島の光明となると思えてこの章を設けた。

6 明治時代の小豆島の称揚

3 冊の本は『瀬戸内海国立公園 寒霞溪』と『十人写生旅行』もう一点は『国立公園小豆島』である。『瀬戸内海国立公園 寒霞溪』では多くの先人の寒霞溪を保護するために尽力された様子が活写されている。寒霞溪そのものを買上げる金を寄付し、しかも陰徳として自分は前になかった長西栄三郎（1834-1912）がまず取り上げられている。次に寒霞溪の美しい景色をこよなく愛しそれを「神懸山真景図」として、今も知られる寒霞溪十二景を描き紹介した島の医師で文人の中桐恂海（1849-1905）。彼は 1898 年に神懸山保勝会を設立した。寒霞溪が明治 11（1878）年に漢学者藤沢南学によって命名された名前であるのに対し、神懸山は古くから地元で呼称されていたこの地の名前である。大正時代に寒霞溪の保全で活躍したのは森遷（1851-1925）であった。彼は行政の立場からあらゆる方向から寒霞溪を整備した。彼が中心となる神懸山保勝会が寒霞溪の保護、保全にあたった。そして次の時代に国立公園制定のために東奔西走し、尽力した郷土史家の高橋和三郎（1872-1960）が取り上げられている。それぞれの人が自分の生きた時代で寒霞溪を保護し、称揚する尽力をおよぶ限りの範囲でなしたことが分かる。限られた人の記憶にあっただけで、歴史の中に忘れ去ろうとしていた地元の人々の功績に大きな光があたえられている。この本を編集された小豆島新聞社の藤井豊氏も小豆島在住で自分が経験し、見聞きしたことだけに、他の人には見えないことが多く見えている。地元の情報に長らく接し、記事にしてきた人なればこそその視点である。さらにこの国立公園 60 周年の記念に先人の顕彰を考えた元内海町長川西寿一氏の発想も素晴らしい。これらの本の出版によって、郷土の誇りが事実として受け継がれる。小豆島において後世に引き継がれるべき知識を世の明るみに出したと言える。

あとがきにこの本に漏れ落ちているものがあると言われ、補う気持ちで少しつけ加える。筆者の手に中村不折の小豆島を描いた絵葉書が 6 枚ある。その一枚が図 9 である。寒霞溪を書いている。有名な画家が小豆島の絵を描く。その効果は景観を褒める効果が高かった。2 冊目の出版物『十人写生旅行』はその間の事情がよくわかる本である。



図9 中村不折画による小豆島の絵葉書。

10人の画家による小豆島の写生旅行の結果を出版した画文集である。10人とは、中村不折、河合新蔵、大下藤次郎、鹿子木孟郎、満谷国四郎、高村眞夫、吉田博、中川八郎、小杉未醒、石井柏亭の10人で、小杉未醒が編集発行をしている。この中には油絵、水彩画、ペン画、鉛筆画などの小豆島の風景があふれている。彼ら画家を招へいして、面倒を見た小豆島の側の配慮もうかがえる。小豆島に素晴らしい風景があるということを当代の画家の手によって世に知らしめるという動きもあって、小豆島が国立公園の第一号に選ばれていくという実感が強く湧く。

さらに先の『国立公園 寒霞溪』に図10の絵が載せられている

この絵には富岡鉄斎が、彼特有の南画風の巍巍とした岩山を実際に見つけた驚きと喜びが絵から伝わってくる。中国南画の特有の景観が日本の小豆島にあった。岩峰の向こうに海が見える。中国にはなかった構図である。鉄斎が小豆島寒霞溪に見いだした景色、岩山の特異さとそれがこの日本に存在しているという驚きに似た気持ちも伝わってくる。寒霞溪を世に広めるに、絵の力を借りて景観の素晴らしさを伝えたいという、島の人々の気持ちすら伝わってくる絵である。

このように国立公園制定の前の時代に小豆島の有志による、私財をも投げうつほどの献身があった。この時代にスポットライトを当てた本の出版に、島に住む人の見識の高さを感じる。今後100年後にも、称揚される光明であると筆者には思える。

もう一点の出版物『国立公園小豆島』は1934年当時の小豆島各地の写真が集められている。歴史的な価値を有する写真集の復刻である。



図 10 富岡鉄斎による小豆島寒霞溪（出典『国立公園寒霞溪 京都国立博物館蔵』）



図 11 大森国松氏による小豆島八十八箇所霊場地図

この時代の小豆島の紹介する印刷物を見ていて、よく目にする人物がある。明治から大正にかけて様々な絵図、地図を出版している。図の脇に小豆郡大鐸村肥土山の大森国松と書かれている。この大森国松氏は初代と 2 代と 2 名いて、手刷りの版木印刷から始めて各地の地図を多く作られたのは初代の大森国松氏（1878-1941）だそうである。図 11 の小豆島遍路の地図を始め、多くの地図を出版している。二代にわたる大森国松氏の印刷業により何種類もの小豆島を紹介する地図を出版している。少なくとも 3 種類以上の小豆島の遍路地図や、四国遍路のための地図、児島八十八ヶ所の巡礼地図などを出版している。小豆島の遍路の興隆へもひそかな貢献があったことがうかがわれる。また、図 12 のような小豆島寒霞溪最新案内真図を数種類印刷出版している。このように小豆島が国立公園に指定される前の時代に多くの人々の献身があつて、国立公園への指定があつた。このことが現在の小豆島観光の基礎を作っていることが認識される。

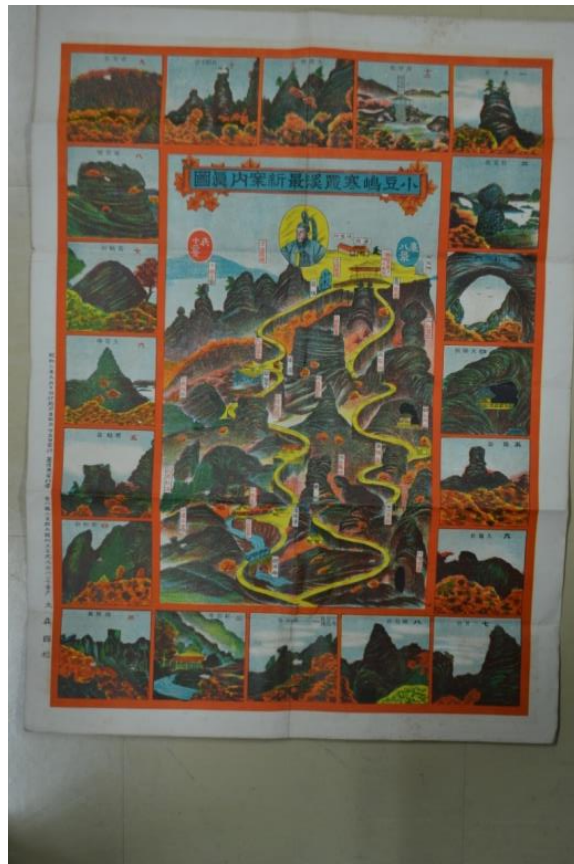


図 12 小豆島寒霞溪最新案内真図

7 まとめ

瀬戸内海島嶼部ではなぜ人口減少、高齢化が進むのかと沖縄の離島に出かけるたびに思ってしまう。国内で出生率の高い町村を選ぶと沖縄の離島であることが多い。生活環境がそれほど違うとは思えないのに。島の置かれている地域の特徴がそれを解くカギなのかと思ってしまう。その中で志々島に U ターン者が返ってきた、しかも原住民の半数に匹敵するくらいの人数が。彼らが及ぼす地域社会の変化はこれから起こってくるであろう。筆者にはそれが志々島の光明として見えて仕方がない。志々島は若い世代、とはいっても定年退職を迎えた人々であるが、彼らを中心に志々島の伝統が引き継がれつつある。島の祭りも復活した。大楠をケアする運動がおこっている。将来島に、見学客が増えそれがなにがしかの観光産業に結びついたらいいと筆者は考えている。一気にそれほどの大金が収入としていられるとは思えないが、島が存続していく一つのサスティナブルな営力として働くことを期待している。

また小豆島では国立公園制定六十周年を記念していくつかの事業がなされた。そのままでは歴史の中に埋没してしまいそうな小豆島の過去の偉人の動きを示す働きが白日のもとに示されたことは知的好奇心を大いに満足させた。自分達の先人の偉業を島の人自身が書きとめて出版すること、これもおおなる光明に思えた。この出版はきっと小豆島の地域

住民の誇りを高めるであろうし、将来の小豆島島民に大きな影響を与えると思える。関係した人々に大いなる経緯を表したい。

参考文献

- 稲田道彦 (2007) 「所帯 28 戸の島、志々島はどのようにして今に至ったのか」 香川大学
瀬戸内海島嶼研究会編『備讃瀬戸地域の島嶼における生活の近代化と文化変容』
109-120p
- 稲田道彦 (2007) 「香川県の瀬戸内海国立公園」 香川大学経済学部ツーリズム研究会編
『新しい観光の諸相』 美功社、153-167p
- 稲田道彦 (2010) 『瀬戸内海の両墓制を訪ねる旅 20 年前の島の墓地の写真を手がかりに』
香川大学瀬戸内圏研究センター 1-16p
- 上田勝見、阿部日吉 (1974) 『瀬戸内海志々島の話』 讃文社、362p
- 上田常市編集兼発行 (1934) 『国立公園小豆島』 山陽製版印刷所、国立公園小豆島復刻事
業委員会 (1994) 「国立公園小豆島 発刊六十周年記念」 マルシマ印刷株式会社
- 小杉未醒 (1911) 『十人写生旅行 瀬戸内海小豆島』 興文社、68p、復刻版川西寿一発行 (1994)
『瀬戸内海国立公園 (寒懸山・寒霞溪) 指定六十周年記念』 マルシマ印刷株式会社
- 斎藤 潤 (2011) 「瀬戸内海の今を歩く 第 39 集 香川県栗島・志々島」 『季刊 しま』 No225、
130-169p
- 藤井 豊 (1995) 『瀬戸内海国立公園 寒霞溪』 マルシマ印刷株式会社、52P